

最後の一句

森鷗外

青空文庫

げんぶん
 元文三年十一月二十三日の事である。大阪で、船乗り業桂
 つらやたるべえ
 屋太郎兵衛というものを、木津川口で三日間さらした上、斬罪
 きづがわぐち
 に処すると、高札こうさつに書いて立てられた。市中至る所太郎兵衛の
 うわさばかりしている中に、それを最も痛切に感ぜなくてはなら
 ぬ太郎兵衛の家族は、南組みなみぐみ堀江橋際ほりえはしぎわの家で、もう丸二年ほ
 ど、ほとんど全く世間との交通を絶つて暮らしているのである。
 この予期すべき出来事を、桂屋へ知らせに来たのは、ほど遠か
 らぬ平野町ひらのまちに住んでいる太郎兵衛が女房の母であつた。この白
 らがあたまおうな
 髪頭の媪の事を桂屋では平野町のおばあ様と言っている。おば
 あ様とは、桂屋にいる五人の子供がいつもいい物をおみやげに持

つて来てくれる祖母に名づけた名で、それを主人も呼び、女房も呼ぶようになっていたのである。

おばあ様を慕って、おばあ様にあまえ、おばあ様にねだる孫が、桂屋に五人いる。その四人は、おばあ様が十七になつた娘を桂屋へよめによこしてから、ことし十六年目になるまでの間に生まれたのである。長女いちが十六歳、二女まつが十四歳になる。その次に太郎兵衛が娘をよめに出す覚悟で、平野町の女房の里さと方かたから、赤子あかこのうちにもらい受けた、長太郎ちやうたろうという十二歳の男子がある。その次にまた生まれた太郎兵衛の娘は、とくとよつて八歳になる。最後に太郎兵衛の始めて設けた男子の初五郎はつごろうがいて、これが六歳になる。

平野町の里方は有ゆう福ふくなので、おばあ様のおみやげはいつも孫たちに満足を与えていた。それが一昨年太郎兵衛の入にゆう牢ろうしてからは、とかく孫たちに失望を起こさせるようになった。おばあ様が暮らし向きの用に立つ物をおもに持って来るので、おもちゃやお菓子は少なくなつたからである。

しかしこれから生おい立つてゆく子供の元氣は盛んなもので、ただおばあ様のおみやげが乏しくなつたばかりでなく、おつか様のふきげんになつたのにも、ほどなく慣れて、格別しおれた様子もなく、相変わらず小さい争鬪と小さい和睦わぼくとの刻々に交代する、にぎやかな生活を続けている。そして「遠い遠い所へ行つて歸らぬ」と言い聞かされた父の代わりに、このおばあ様の来るのを歎

迎している。

これに反して、厄難やくなんに会つてからこのかた、いつも同じような悔恨と悲痛とのほかに、何物をも心に受け入れることのできなくなつた太郎兵衛の女房は、手厚くみついでくれ、親切に慰めてくれる母に対しても、ろくろく感謝の意をも表することがない。母がいつ来ても、同じような繰くり言ごとを聞かせて帰すのである。

厄難に会つた初めには、女房はただ茫ぼう然ぜんと目をみはつていて、食事しょくじも子供のために、器械的に世話をするだけで、自分はほとんど何も食わずに、しきりに咽のどがかわくと言つては、湯を少しずつ飲んでいた。夜は疲れてぐつすり寝たかと思うと、たびたび目をさましてため息をつく。それから起きて、夜なかに裁縫などをす

ることがある。そんな時は、そばに母の寝ていぬのに気がついて、最初に四歳になる初五郎が目をさます。次いで六歳になるとくが目をさます。女房は子供に呼ばれて床とこにはいつて、子供が安心して寝つくと、また大きく目をあいてため息をついているのであつた。それから二三日たつて、ようよう泊まりがけに来ている母に繰り言ごとを言つて泣くことができるようになった。それから丸二年ほどの間、女房は器械的に立ち働いては、同じように繰り言を言い、同じように泣いているのである。

高札こうざつの立つた日には、午過ぎひるすに母が来て、女房に太郎兵衛の運命のきまつたことを話した。しかし女房は、母の恐れたほど驚きもせず、聞いてしまつて、またいつもと同じ繰り言ごとを言つて泣

いた。母はあまり手ごたえのないのを物足らなく思うくらいであった。この時長女のいちふすまは、襖の陰に立って、おばあ様の話を聞いていた。

桂屋にかぶさつて来た厄難というのはこうである。主人太郎兵衛は船乗りとは言つても、自分が船に乗るのではない。北国ほつこく通いの船を持つていて、それに新七しんしちという男を乗せて、運送の業を営んでいる。大阪ではこの太郎兵衛のような男を居船頭いせんどうと言つていた。居船頭の太郎兵衛が沖船頭おきせんどうの新七を使つているのである。

元文元年の秋、新七の船は、

出羽でわのくに国秋田あきたから米を積んで出帆

した。その船が不幸にも航海中に風波の難に会つて、半難船の姿になつて、横み荷の半分以上を流失した。新七は残つた米を売つて金にして、大阪へ持つて歸つた。

さて新七が太郎兵衛に言うには、難船をしたことは港々で知っている。残つた積み荷を売つたこの金は、もう米主こめぬしに返すには及ぶまい。これはあとの船をしたてる費用に当てようじゃないかと言つた。

太郎兵衛はそれまで正直に営業していたのだが、営業上に大きい損失を見た直後に、現金を目の前に並べられたので、ふと良心の鏡が曇つて、その金を受け取つてしまった。

すると、秋田の米主のほうでは、難船の知らせを得たのちに、

残り荷のあつたことやら、それを買った人のあつたことやらを、人づてに聞いて、わざわざ人を調べに出した。そして新七の手から太郎兵衛に渡った金かね高たかまでを探り出してしまった。

米主は大阪へ出て訴えた。新七は逃走した。そこで太郎兵衛がにゆうろう入い牢らうしてとうとう死罪に行なわれることになったのである。

平野町のおばあ様が出来て、恐ろしい話をするのを姉娘のいちが立ち聞きをした晩の事である。桂屋の女房はいつも繰くり言ごとを言つて泣いたあとで出る疲れが出て、ぐっすり寝入った。女房の両わきには、初五郎と、とくとが寝ている。初五郎の隣には長太郎が寝ている。とくの隣にまつ、それに並んでいちが寝ている。

しばらくたって、いちが何やらふとんの中でひとり言を言った。「ああ、そうしよう。きつとできるわ」と、言ったようである。まつがそれを聞きつけた。そして「ねえさん、まだ寝ないの」と言った。

「大きい声をおしでない。わたしいい事を考えたから。」いちはずこう言つて妹を制しておいて、それから小声でこういう事をささやいた。おとっさんはあさつて殺されるのである。自分はそれを殺させぬようにすることができると思う。どうするかというと、願書ねがいしょというものを書いてお奉行様ぶぎようさまに出すのである。しかしただ殺さないでおいとくださいと言つたつて、それではきかれない。おとっさんを助けて、その代わりにわたくしども子供を

殺してくださいと言って頼むのである。それをお奉行様がきいてくださって、おとつさんが助かれば、それでいい。子供はほんとうに皆殺されるやら、わたしが殺されて、小さいものは助かるやら、それはわからない。ただお願いをする時、長太郎だけはいっしよに殺してくださいさらないように書いておく。あれはおとつさんのほんとうの子でないから、死ななくてもいい。それにおとつさんがこの家の跡を取らせようと言っていらつしやつたのだから、殺されないほうがいいのである。いちが妹にそれだけの事を話した。

「でもこわいわねえ」と、まつが言った。

「そんなら、おとつさんが助けてもらいたくないの。」

「それは助けてもらいたいわ。」

「それ御覧。まつさんはただわたしについて来て同じようにさえていければいいのだよ。わたしが今夜願書ねがいしょを書いておいて、あしたの朝早く持つていきましようね。」

いち は起きて、手習いの清書をする半紙に、平がなで願書がんしょを書いた。父の命を助けて、その代わりに自分と妹のまつ、とく、弟の初五郎をおしおきにしていただきたい、実子でない長太郎だけはお許しくださいるようにというだけの事ではあるが、どう書きつづつていいかわからぬので、幾度も書きそこなつて、清書のためにもらつてあつた白紙しろかみが残り少なくなつた。しかしとうとう一番鶏ちばんどりの鳴くころに願書ができた。

願書を書いているうちに、まつが寝入ったので、いちこゝろは小声で呼び起こして、床とこのわきに畳んであつたふだん着に着かえさせた。そして自分もしたくをした。

女房と初五郎とは知らずに寝ていたが、長太郎が目をさまして、「ねえさん、もう夜が明けたの」と言った。

いちこゝろは長太郎の床とこのそばへ行つてささやいた。「まだ早いから、お前は寝ておいで。ねえさんたちは、おとつさんのだいじな御用で、そつと行つて来る所があるのだからね。」

「そんならおいらもゆく」と言つて、長太郎はむつくり起き上がった。

いちこゝろは言った。「じゃあ、お起き、着物を着せてあげよう。長

さんは小さくても男だから、いつしよに行つてくれれば、そのほうがいいのよ」と言つた。

女房は夢のようにあたりの騒がしいのを聞いて、少し不安になつて寝がえりをしたが、目はさめなかつた。

三人の子供がそつと家を抜け出したのは、にばんどり二番鶏の鳴くころであつた。戸の外は霜の暁であつた。提ちようちん灯を持って、拍子ひようし

木をたたいて来る夜回りのじいさんに、お奉行様の所へはどう

行つたらゆかれようと、いちがたずねた。じいさんは親切な、物

わかりのいい人で、子供の話をまじめに聞いて、月番つきばんの西奉にしぶぎ

行所ようしよのある所を、丁寧ていねいに教えてくれた。当時の町奉行は、東が

稲垣いながき淡路あわじ路守のかみ種信たねのぶで、西がささまたしろうなりむね佐佐又四郎成意ささまたしろうなりむねである。そして

十一月には西の佐佐が月番に当たっていたのである。

じいさんが教えているうちに、それを聞いていた長太郎が、

「そんなら、おいらの知った町だ」と言った。そこで姉きょうだい妹は

長太郎を先に立てて歩き出した。

ようよう西奉行所にたどりついて見れば、門がまだ締まっていた。門番所の窓の下に行つて、いちが「もしもし」とたびたび繰り返して呼んだ。

しばらくして窓の戸があいて、そこへ四十格がっこう好の男の顔がのぞいた。「やかましい。なんだ。」

「お奉行様にお願いがあつてまいりました」と、いちが丁寧に腰をかがめて言った。

「ええ」と言っただが、男は容易にことばの意味を解しかねる様子であつた。

いちはまだ同じ事を言った。

男はようようわかつたらしく、「お奉行様には子供が物を申し上げることはできない、親が出て来るがいい」と言った。

「いいえ、父はあしたおしおきになりますので、それについてお願いがございます。」

「なんだ。あしたおしおきになる。それじゃあ、お前は桂屋太郎兵衛の子か。」

「はい」といちが答えた。

「ふん」と言つて、男は少し考えた。そして言った。「けしから

ん。子供までが上かみを恐れんと見える。お奉行様はお前たちにお会いはない。帰れ帰れ。」こう言つて、窓を締めてしまった。

まつが姉に言つた。「ねえさん、あんなにしかるから帰りましよう。」

いちと言つた。「黙つておいで。しかられたつて帰るのじやありません。ねえさんのするとおりにしておいで。」こう言つて、いちが門の前にしゃがんだ。まつと長太郎とはついてしゃがんだ。三人の子供は門のあくのをだいぶ久しく待つた。ようよう貫かんの木きをはずす音がして、門があいた。あけたのは、先に窓から顔を出した男である。

いちが先に立つて門内に進み入ると、まつと長太郎とが後ろに

続いた。

いちの態度があまり平気なので、門番の男は急にささえとどめようともせずにはいた。そしてしばらく三人の子供の玄関のほうへ進むのを、目をみはって見送っていたが、ようよう我れに帰って、「これこれ」と声をかけた。

「はい」と言つて、いちはおとなしく立ち留まつて振り返つた。

「どこへゆくのだ。さつき帰れと言つたじゃないか。」

「そうおっしゃいましたが、わたくしどもはお願いを聞いていたたくまで、どうしても帰らないつもりでございます。」

「ふん。しぶといやつだな。とにかくそんな所へ行つてはいかん。こつちへ来い。」

子供たちは引き返して、門番の詰所つめしよへ来た。それと同時に玄関わきから、「なんだ、なんだ」と言つて、二三人の詰衆つめしゅうが出て来て、子供たちを取り巻いた。いちほとんどこうなるのを待ち構えていたように、そこにうづくまって、懐中から書付かきつけを出して、まつ先よりきにいる与力の前にさしつけた。まつと長太郎ともいっしょにうづくまって礼をした。

書付を前へ出された与力は、それを受け取ったものか、どうしたものと迷うらしく、黙つていちの顔を見おろしていた。

「お願いでございます」と、いちが言った。

「こいつらは木津川口でさらし物になつている桂屋太郎兵衛の子供でございます。親の命いのちご乞こいをするのだと言つています」と、

門番がかたわらから説明した。

与力は同役どうやくの人たちを顧みて、「ではとにかく書付を預かっておいて、伺ってみることにしましょうかな」と言った。それにはたれも異議がなかった。

与力は願書がんしよをいちの手から受け取って、玄関にはいった。

西町奉行の佐佐は、両奉行の中の新参しんざんで、大阪に来てから、まだ一年たっていない。役向きの事はすべて同役の稲垣いながきに相談して、城代じょうだいに伺って処置するのであった。それであるから、桂屋太郎兵衛の公事くじについて、前役まえやくの申し継ぎを受けてから、それを重要事件として気にかけていて、ようよう処刑の手続きが

済んだのを重荷をおろしたように思っていた。

そこへけさになつて、宿直の与力よりきが出て、命乞いのちごいの願ひに出たものがあると云つたので、佐佐はまずせつかく運ばせた事に邪魔がはいつたように感じた。

「参つたのはどんなものか。」佐佐の声はふきげんであつた。

「太郎兵衛の娘兩人と倅せがれとがまいりまして、年上の娘が願書がんしょをさし上げたいと申しますので、これに預かつております。御覧になりましょうか。」

「それは目安箱めやすばこをもお設けになつておる御趣意から、次第によつては受け取つてもよろしいが、一応はそれぞれ手続きのあることを申し聞かせんではなるまい。とにかく預かつておるなら、内

見しよう。」

与力は願書を佐佐の前に出した。それをひらいて見て佐佐は不審らしい顔をした。「いちというのがその年上の娘であろうが、何歳になる。」

「取り調べはいたしません、十四五歳ぐらいに見受けれます。」

「そうか。」佐佐はしばらく書^{かきつけ}付を見ていた。ふつつかなかな

文字で書いてはあるが、条理がよく整っていて、おとなでもこれだけの短文に、これだけの事がらを書くのは、容易であるまいと思われるほどである。おとなが書かせたのではあるまいかという念が、ふときぎざした。続いて、上^{かみ}を偽る横^{おうちやくもの}着物^{もの}の所為ではな
いかと思議した。それから一応の処置を考えた。太郎兵衛は明^{みょう}

日にちの夕方までさらすことになっている。刑を執行するまでには、まだ時がある。それまでに願書がんしょを受理しようとも、すまいとも、同役に相談し、上役うわやくに伺うこともできる。またよしやその間に情偽じょうぎがあるとしても、相当の手続きをさせるうちには、それを探ることもできよう。とにかく子供を帰そうと、佐佐は考えた。

そこで与力よりきにはこう言った。この願書は内見したが、これは奉行に出されぬから、持って帰って町年寄まちどしよりに出せと言えと言った。

与力は、門番が帰そうとしたが、どうしても帰らなかつたということを、佐佐に言った。佐佐は、そんなら菓子でもやって、すかして帰せ、それでもきかぬなら引き立てて帰せと命じた。

与力の座を立つたあとへ、城代じょうだい太田備中守資晴おたびちゅうのかみすけはるがた

ずねて来た。正式の見回りではなく、私の用事があつて来たのである。太田の用事が済むと、佐佐はただ今かようかようの事があつたと告げて自分の考えを述べ、さしずを請うた。

太田は別に思案もないので、佐佐に同意して、午過ぎひるすに東町奉行稲垣をも出席させて、町年寄五人に桂屋太郎兵衛が子供を召し連れて出させることにした。情偽でがあらうかという、佐佐の懸念ももつともだというので、白州しらすへは責め道具を並べさせることにした。これは子供をおどして実を吐かせようという手段である。ちようどこの相談が済んだところへ、前の与力よりきが出て、入り口に控えて気色けしきを伺った。

「どうじゃ、子供は帰ったか」と、佐佐が声をかけた。

「御意ごいでござりまする。お菓子をつかわしまして帰そうといたしましたが、いちと申す娘がどうしてもききませぬ。とうとう願がんし書をふところへ押し込みまして、引き立てて帰しました。妹娘はしくしく泣きました。が、いち泣かずに帰りました。」

「よほど情じょうのこわい娘と見えますな」と、太田が佐佐を顧みて言つた。

十一月二十四日の未ひつじの下刻げこくである。西町奉行所の白州しらすははればれしい光景を呈している。書院しよいんには両奉行が列座する。奥まつた所には別席を設けて、表向きの出座しゅつざではないが、城代が取り調べの模様をよそながら見に来ている。縁側には取り調べを命ぜ

られた与力が、書役かきやくを従えて着座する。

同心どうしんらが三道具みつどうぐを突き立てて、いかめしく警固している庭

に、拷問に用いる、あらゆる道具が並べられた。そこへ桂屋太郎兵衛の女房と五人の子供とを連れて、町年寄まちどしより五人が来た。

尋問は女房から始められた。しかし名を問われ、年を問われた時に、かつがつ返事をしたばかりで、そのほかの事を問われても、「いっこうに存じませぬ」、「恐れ入りました」と言うよりほか、何一つ申し立てない。

次に長女いちが調べられた。当年十六歳にしては、少し幼く見える、瘦肉やせじしの小娘である。しかしこれはちとの臆おくする気色けしきもなしに、一部始終の陳述をした。祖母の話をも物陰から聞いた事、夜

になつて床とこに入つてから、出願を思い立つた事、妹まつに打ち明けて勧誘した事、自分で願書がんしょを書いた事、長太郎が目をさましたので同行を許し、奉行所の町名を聞いてから、案内をさせた事、奉行所に来て門番と応対し、次いで詰つめしゆう衆よりきの与力に願書の取次を頼んだ事、与力らに強要せられて帰つた事、およそ前日来経歴した事を問われるままに、はつきり答えた。

「それではまつのほかにはだれにも相談はいたさぬのじやな」と、
とりしらべやく
 取調役が問うた。

「だれにも申しません。長太郎にもくわしい事は申しません。おとつさんを助けていただくように、お願いしに行くとお申しただけでございます。お役所から帰りまして、年寄衆としよりしゆうのお目にかか

りました時、わたくしども四人の命をさしあげて、父をお助けく
 ださるように願うのだと申しましたら、長太郎が、それでは自分
 も命がさしあげたいと申して、とうとうわたくしに自分だけのお
 願ねがいしよ書がを書かせて、持ってまいりました。」

いちがこう申し立てると、長太郎がふところから書かきつけ付けを出し
 た。

取調役とりしらべやくのさしずで、同心どうしんが一人長太郎の手から書かきつけ付けを
 受け取つて、縁側に出した。

取調役はそれをひらいて、いちの願書がんしよと引き比べた。いちの願
 書は町年寄まちどしよりの手から、取り調べの始まる前に、出させてあつた
 のである。

長太郎の願書には、自分も姉や弟きょうだい妹といっしよに、父の身代わりになって死にたいと、前の願書と同じ手跡で書いてあつた。取調役は「まつ」と呼びかけた。しかしまつは呼ばれたのに気がつかなかった。いちが「お呼びになつたのだよ」と言つた時、まつは始めておそるおそるうなだれていた頭こうべをあげて、縁側の上の役人を見た。

「お前は姉といっしよに死にたいのだな」と、取調役が問うた。まつは「はい」と言つてうなずいた。

次に取調役は「長太郎」と呼びかけた。

長太郎はすぐに「はい」と言つた。

「お前は書付に書いてあるとおり、兄弟いっしよに死にたいの

じやな。」

「みんな死にますのに、わたしが一人生きていたくはありません」と、長太郎ははつきり答えた。

「とく」と取調役とりしらべやくが呼んだ。とくは姉や兄が順序に呼ばれたので、こん度は自分が呼ばれたのだと気がついた。そしてただ目をみはって役人の顔を仰ぎ見た。

「お前も死んでもいいのか。」

とくは黙って顔を見ているうちに、くちびるに血色がなくなつて、目に涙がいつぱいたまつて来た。

「初五郎」と取調役が呼んだ。

ようよう六歳になる末子ぼっしの初五郎は、これも黙って役人の顔を

見たが、「お前はとうじや、死ぬるのか」と問われて、活発にかぶりを振った。書院の人々は覚え、それを見てほほえんだ。

この時佐佐が書院の敷居ぎわまで進み出て、「いち」と呼んだ。

「はい。」

「お前の申し立てにはうそはあるまいな。もし少しでも申した事に間違いがあつて、人に教えられたり、相談をしたりしたのなら、今すぐに申せ。隠して申さぬと、そこに並べてある道具で、誠の事を申すまで責めさせるぞ。」佐佐は責め道具のある方角を指さした。

いちはさされた方角を一目見て、少しもたゆたわずに、「いえ、申した事に間違いはございません」と言い放った。その目は冷や

やかで、そのことばは徐かしずであつた。

「そんなら今一つお前に聞くが、身代わりをお聞き届けになると、お前たちはすぐに殺されるぞよ。父の顔を見ることはできぬが、それでもいいか。」

「よろしゅうございます」と、同じような、冷ややかな調子で答えたが、少し間まを置いて、何か心に浮かんだらしく、「お上かみの事には間違いはございませんまいから」と言い足した。

佐佐の顔には、不意打ちに会つたような、驚きよう愕がくの色が見えたが、それはすぐに消えて、険しくなつた目が、いちの面おもてに注がれた。憎悪ぞうおを帯びた驚異の目とでも言おうか。しかし佐佐は何も言わなかつた。

次いで佐佐は何やら取調とりしらべやく役にささやいたが、まもなく取調

役が町年寄まちどしよりに、「御用が済んだから、引き取れ」と言い渡した。

しらす

白州を下がる子供らを見送つて佐佐は太田と稲垣とに向いて、

「生おいさき先の恐ろしいものでござりますな」と言った。心の中には、

哀れな孝行娘の影も残らず、人に教唆きようさせられた、おろかな子供

の影も残らず、ただ氷のように冷ややかに、刃やいばのように鋭い、い

ちの最後のことばの最後の一句が反響しているのである。元文ご

ろの徳川家の役人は、もとより「マルチリウム」という洋語も知

らず、また当時の辞書には献身という訳語もなかったので、人間

の精神に、老若男女ろうじやくなんによの別なく、罪人太郎兵衛の娘に現われた

ような作用があることを、知らなかったのは無理もない。しかし

献身のうちに潜む反抗ほこさきの鋒は、いちとことばを交えた佐佐のみではなく、書院にいた役人一同の胸をも刺した。

城じょうだい代だい

も両奉行もいちを「変な小娘だ」と感じて、その感じ

には物でも憑ついているのではないかという迷信さえ加わったので、孝女に対する同情は薄かったが、当時の行政司法の、元始的な機

関が自然に活動して、いちの願意は期せずして貫徹した。桂屋太

郎兵衛の刑の執行は、「江戸へ

うかがいちゆうひのべ伺か中ちゆう日延ひのべ

」ということにな

った。これは取り調べのあつた翌日、十一月二十五日に町年寄まちどしより

に達せられた。次いで元文四年三月二日に、「京都において大だいじ

嘗会ようえ御執行相成り候そろてより日にちげん

限げんも相立たざる儀につき、

太郎

兵衛事、死罪御赦免仰せいだされ、大阪北、南組、天満てんまの三口くちお
 御構かまの上追放」ということになった。桂屋の家族は、再び西奉
 行所に呼び出されて、父に別れを告げることができた。大嘗会と
 いうのは、貞享じょうきょう四年に東山ひがしやま天皇てんのうの盛儀があつてから、桂
 屋太郎兵衛の事を書いた高札こうさつの立った元文三年十一月二十三日
 の直前、同じ月の十九日に五十一年目に、桜町さくらまち天皇てんのうが挙行し
 たもうまで、中絶していたのである。

青空文庫情報

底本：「山椒大夫・高瀬舟」岩波文庫

1938（昭和13）年7月1日第1刷発行

1967（昭和42）年6月16日第34刷改版発行

1998（平成10）年4月6日第77刷発行

初出：「中央公論 第30年第11号」

1915（大正4）年10月1日

入力：kompass

校正：土屋隆

2006年3月21日作成

2011年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

最後の一句

森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>